慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「主題上の役割」を持たない位置の分布について
Sub Title	On the distribution of non φ-position
Author	加藤木, 能文(Katogi, Yoshifumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1981
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.42, (1981. 12) ,p.332(9)- 340(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00420001-0340

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「主題上の役割」を持たない位置の分布について

加藤木　能文

1.　文中で，名詞句 (Noun Phrase 以下 NP と略す) が果たす，「主題上の役割」(Thematic role 以下 θ-role) は，英語のような言語においては，通常，語順によって決定されると言われている。

(1)　John gave his sister a doll
(2)　Tom broke the glass

例えば，上の例文 (1) で，John が「動作の起点」(source-of-action) であり，his sister が「動作の目的地」(goal-of-action) であり，a doll が「移動するもの」(theme) であることは，それぞれが動詞 gave の主語，間接目的語，直接目的語であることに対応している。例文 (2) について，その関係を見れば，Tom＝主語＝動作主 (agent-of-action) であり，the glass＝目的語＝被動作主 (patient-of-action) となっている。こうした関係は，文法内の辞書 (lexicon) におけるそれぞれの動詞の機能構造 (Functional structure) としてとらえることが出来る。則ち，例えば一項動詞 walk，二項動詞 break，三項動詞 give の機能構造は，辞書において次の様に記載されておればよい。

WALK (Agent)
BREAK (Agent) (Patient)
GIVE (Source) (Goal) (Theme)

日本語の動詞「歩く」「壊す」「与える」の機能構造も，上記の英語の対応する動詞のそれに等しいものと思われる。このことは，θ-role の限定さ

れた集合が，かなり普遍的な記述力を持つことを示唆している。

2. ところで，ある種の構文は，特定の θ-role を荷わない位置を含むことが古くから観察されてきた。その一つは，関係節である。

(3) I want to see the boy who can speak Spanish well.
(4) I will meet the man whom John respects.
(5) I went to see the girl whom Tom had sent the letter.

上例(3)〜(5)において，関係節の主部 (Head) はそれぞれ，speak の主語，respects の目的語，sent の(間接)目的語の θ-role を荷っている。

日本語においても同様であり，以下の例文(6)〜(8)内の関係節の主部(下線部分)は，それぞれ異なった θ-role を持つ。

(6) 私はラテン語を流暢に話す<u>少年</u>に会いたい。
(7) 私は次郎が読んだ<u>雑誌</u>を捨てた。
(8) 私は良雄が手紙を送った<u>少女</u>を見かけた。

以下，特定の θ-role が与えられる位置を θ-position，特定の θ-role が与えられない位置を non-θ-position と呼ぶことにする。本小論の目的は，non-θ-position の分布について一般的な予想をすることにある。

3. まず関係節の構造について考察してみよう。70年代中期以降，変形生成文法の枠組み中で，痕跡理論 (trace theory) が発達した。それによると，変形規則によって動かされた要素は，それによって束縛される空範疇，即ち trace を後に残す，とされる。

(9) $[_{NP}e]$ seems $[_{S}$John to be rich]
(10) $[_{NP}$John] seems $[_{S}$ t to be rich]

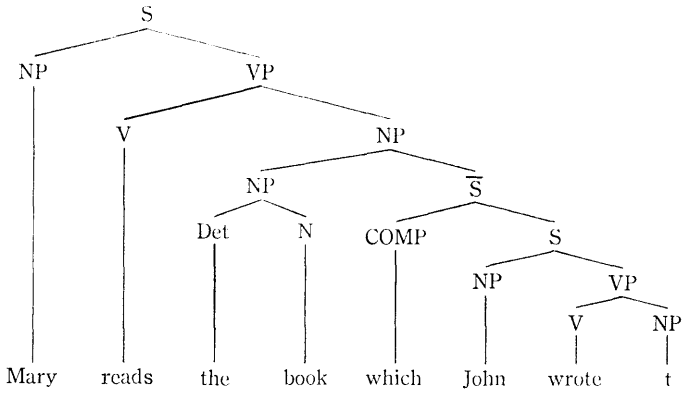
例えば，例文(10)は(9)の補文の主語 John が名詞句移動規則 (NP-movement) によって前置された結果，派生されたものとされ，名詞(句) John は，それが束縛する trace(=t) を残す，と考えられている。

(11) The enemy destroyed the city
(12) The city was destroyed t by the enemy

(9)(10)の例でも明らかだが，先行詞によって束縛される trace を仮定することによって，従来深層構造で決定され，深層でのみ表示されるとされていた主題関係を，表層構造のレベルからも読み取ることが出来るようになった。例文(11)(12)の知的同義性，則ち主題関係の共通性のうち，名詞句 the city が動詞 destroy の patient であることは，それが束縛する t の位置から知ることが出来る。移動規則に関する痕跡理論は，現在ではかなり一般的に受け入れられた仮説と言ってよいと思われる。

さて，こうした仮説に基づいて関係節の構造を考えてみると，普通，次の例文(13)の表層構造は(14)のようなものとされる。(細部略)

(13) Mary reads the book which John wrote
(14)



現在の理論によれば，動詞の補部 (Complement) はすべて θ-position であるが，主語に θ-role が与えられるかどうかは，それぞれの動詞の性質によって決まる。例えば break は主語に agent という θ-role を与えるが，seem は文の主語に何も θ-role を与えない。(ないしは θ-role「ゼロ」を与える) また一般に，受身文の主語は non-θ-position である，とされて

いる。即ち，NP-movement によって移動される NP の着地点は non-θ-position であると想定されているわけである。これは，「一つの項 (argument) は唯一つの θ-role を荷い，かつ一つの θ-role は一つの項にのみ付与される」という条件（「θ-基準」"θ-criterion" と呼ばれている）から当然導き出されて来る仮定である。

例文(13)においては，関係節中の動詞 wrote は主語に θ-role を与えるものと思われる。一般に補部として NP をとる動詞は，主語にも θ-role を与える強い傾向がある旨の観察が，Chomsky (1981) によって為されており，動詞 write も例外と考えるべき根拠はないからである。さて，従って (14) において John と trace (COMP 内の WH-要素の trace とされている）にはそれぞれ θ-role が与えられている。更に，名詞句 "the book which John wrote" 全体には，主文の動詞 read によって，何らかの θ-role が付与される。関係節の主部 "the book" に何らの θ-role も与えられないのは，動詞が主語より上位の節点 (node) に θ-role を与えられず，かつまた上位の動詞も NP を越えて θ-role を付与することが不可能であることによるものと思われる。また，下の例文 (14) (15) を観察すると，NP だけではなく，S も θ-role 付与に対する障壁になることが判る。

(14) Tom hopes [$_S$ that [$_S$ Mary will pass the exam.]]
(15) Tom believes [$_S$[$_S$ John to be rich]]

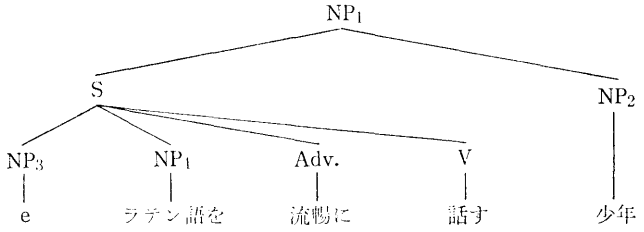
即ち両文において，Mary, John が荷う θ-role は，それぞれ動詞 pass, 述語 be rich によって与えられたものであり，主文の動詞 hope, believe によるものではない。もし，こうした，補文をとる動詞に補文内部に立ち入って θ-role を与える力があれば，与えられた要素は補文内部の動詞（より一般的に言えば「述語」）による θ-role と合わせて二重に θ-role を付与されてしまい，θ-基準に違反することになる。

主語，補部（目的語及び補文）は動詞によって k-統御[10]される位置であるから，語彙的な理由に基づかない（則ち seem や受身文の主語が θ-role を持たないのとは別の，より構造的な理由での）non-θ-position は，動詞

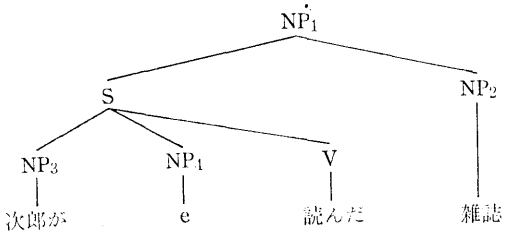
に k-統御されない位置ということになる。そして k-統御されていても，途中に NP あるいは S があれば，θ-role 付与は不可能になる。換言すれば，θ-position とは途中に障壁となる節点 NP と S を含まないで，動詞に k-統御されている位置ということになる。

4. 上の仮説によって日・英語の構文の中に，non-θ-position を探してみると，日本語の関係節，英語の話題化文 (Topicalized Sentence)，分裂文 (Cleft Sentence) などが条件を満たしているように思われる。

(16)



(17)



(16)(17)は，それぞれ例文(6)(7)に対応する表層構造の一部であるが，NP_2 が下位の動詞に k-統御されず，上位の動詞との間には NP_1 が介在しているため，いずれからも θ-role を与えられない位置にあることが判る。([$_{NP}$e] は音形を持たない NP であり，いずれかのレベルで NP_2 に束縛される。) 日本語と英語の関係節構造を比較してみると，両者ともに θ-role が直接には与えられない要素とともに，構造上の gap，即ち音形を

持たない要素（空範疇＝英語の t，日本語の e）を含む点が注目される。θ-基準が妥当なものである限り，関係節の主部と言えども θ-基準が適用されるレベルでは θ-role を持たなくてはならない。「non-θ-position にある NP はそれが束縛している空の NP から θ-role を継承する」という規約を設ければ，この点は解決するものと思われる。

次に話題化文と分裂文について検討する。

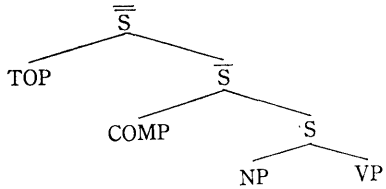
(18) $[_{\bar{S}}[_{TOP}$ this book$]$ $[_{S}[_{S}$ John asked the students to read$]]]$

(19) $\bar{\bar{S}} \longrightarrow$ TOP $\bar{S}$

(20) It is $\bar{\bar{S}}$

Chomsky (1977) によれば，話題化文を派生する句構造規則 (Phrase Structure Rule) は (19) であり，また分裂文は (20) の構造を持つとされている。この分析に従うならば，話題化文，分裂文はともに non-θ-position (＝TOP) を含むことは明らかである。則ち (21) の樹形図が示す通り，TOP の位置はいかなる動詞によっても k-統御されない。

(21)



実際，以下の例文から判るように，分裂文の焦点の位置（下線部分）はそれ自身としては何の θ-role も与えない[2)]

(21) It is <u>John</u> that broke the window

(22) It is <u>this vase</u> that his mother believes John broke

? (23) It is <u>her brother</u> that Mary gave the dictionary

(21) において John は broke の agent であり，(22) の this vase は patient であり，(23) では her brother が gave の goal である。これ

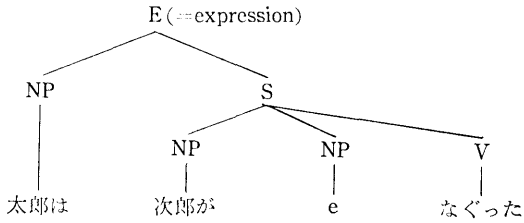
らの θ-role は関係節の場合と同じく，補文中の空範疇（[$_{NP}$e]）を焦点の NP が束縛することにより引き継がれるものと思われる。

5. 最後に，日本語の主題化文，即ち助詞「は」を含む文について考察する。「は」が「が」「を」「に」といった格助詞と異なり，特定の θ-role を NP に与えないことは，昔から指摘されてきた。

(24) 太郎は，その本を一週間で読んだ
(25) 次郎は，母親が学校へ連れていった
(26) 三郎は，花子がラブ・レターを出した

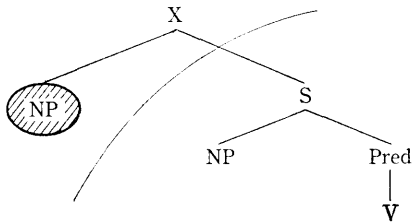
このことは，「は」でマークされる NP が non-θ-position にあることを，即ち動詞によって k-統御されない位置にあることを示唆している。例えば (27) の様な構造が考えられる。

(27)

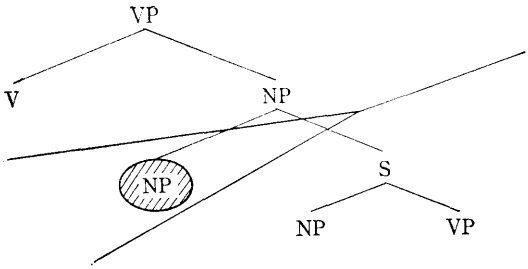


6. 以上，日・英語の若干の例において構造上の non-θ-position の分布について考察してきた。我々が検討した仮説によれば（1）動詞によって k-統御されない，あるいは，（2）S ないし NP によって動詞と隔てられている場合，即ち (28) (29) の斜線部分の位置等が non-θ-position であるということになる。

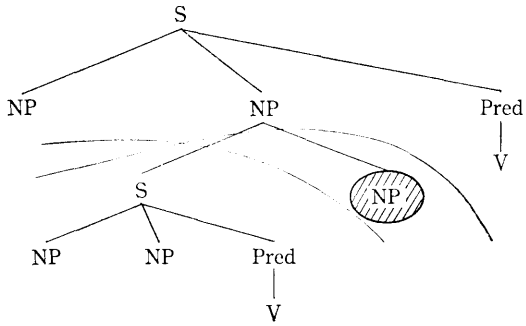
(28)



(29)



(29)′



この仮説は，日本語・英語以外の言語についても当てはまるものと予想される。しかしその当否は，様々な言語について経験的に実証されねばならないことは言うまでもない。

注

1) A と B が支配関係になく，かつ A を支配する最初の循環節点 (NP あるいは S) が B を支配している時，A は B を k-統御 (k-command) する，と言う

2) この場合，更に一般に Be 動詞が *θ*-role を付与するかどうかについては明らかでない点が多く，結論が出ていない。

References

Bresnan, J. (1973), "A Realistic Transformational Grammar" in Halle, Bresnan, and Miller, eds.

Chomsky, N. (1977), "On wh-movement" in Culicover, Wasow, and Akmajian eds.

Chomsky, N. (1981), *Lectures on Government and Binding*, Foris.

Culicover, P., T. Wasow and A. Akmajian, eds. (1977), *Formal Syntax*, Academic Press.

Halle, M., J. Bresnan and G. Miller, eds. (1978), *Linguistic Theory and Phychological Reality*, MIT.